

るが、とくに少肥条件での減収は「前進」より少ない。

6. 耐倒伏性は「オホーツク」に比べると、いくぶん劣るが、「前進」に比べて明らかにまさる。

7. 冠さび病に対する罹病程度は「前進」並みで、とくに強くない。

栽培適地と奨励態度 道内各地の試験結果、多くの場所で「前進」を上回る多収性を示し、しかも「前進」に比べて、熟期が早い、穂数が多く倒伏しにくい、浮率が低く外観品質も良好であるなどのすぐれた点が認められるので、全道で「前進」におきかえて栽培する。ただ冠さび病には強くないので、さび病の多発地方では避けた方がよい。

耐倒伏性は「前進」を上回ってはいるが、倒伏防止のため施肥量の増加は避けた方がよい。

7. とうもろこし

〈飼料用〉

(1) ジャイアンツ (本交3304)

来歴 「ジャイアンツ」は、1951年(昭26)に米国より導入した細胞質雄性不稔系統「WF9^{-T}」を利用した単交配と、1955年(昭30)に青森県立農業試験場より分譲を受けた青森県在来の「エローデント」との間の一代雑種である。

1956年(昭31)に(単交配×品種)の組合せが行われ、1957年(昭32)より生産力検定試験を開始し、1959年(昭34)以降、系統適応性検定試験および各場の原種決定試験に、1960年(昭35)以降は原種決定現地試験に供試した。1962年(昭37)優良品種に決定し、「ジャイアンツ」と命名された。

組合せ内容および構成する自殖系統の来歴は次のとおりである。

(「WF9^{-T}」×「W22」)MS×「青森在来エローデント」「WF9^{-T}」：ウイソコンシン農試においてTexas型細胞質雄性不稔個体と「Indiana WF9」の戻し交配により育成。

「W22」：ウイソコンシン農試において、「2nd Cycle Ill. B 10」×「W25」より育成。

特性概要 1. 熟期は「青森エローデント」より、約5日早く、「複交3号」より約5日おそい。

2. 総生草量は、府県産「エローデント」に比して5～10%低く、「複交3号」よりは50～80%多収である。

3. 子実量は、「府県産エローデント」に比して20～50%増収し、「複交3号」よりはやや劣る。年次による生産量の変動は少なく安定している。

4. 雌穂は円筒型で太く長い。粒列は12～22行、1列粒数は約40粒である。粒は黄色のデント種で、「エローデント」に比しやや小さい。

5. 草丈、着穂高ともに「エローデント」より低く、倒伏には強い。

6. 栄養収量の試算値によると、飼料単位、可消化蛋白質ともに「エローデント」に比して約20%増収し、年次間の変動も少ない。ただし、道東、道北地域では熟度の関係でむしろ「複交3号」「複交8号」などに劣る場合もある。

7. 細胞質雄性不稔系統、およびその回復因子を利用しているので採種の場合に除雄操作を必要としないため種子価格の低減をはかることができる。

8. 熟期の点から本道よりは府県の暖地で採種することが望ましい。

栽培適地および奨励態度 サイレージ用として、北海道中央部以南、および道東、道北地域の栽培環境のよい地帯における「府県産エローデント」の栽培地帯に奨励する。

試験場名	抽出期		収穫期	収穫期における熟度	生育日数	稈長	着穂高	10a 当り			試験年次
	雄穂	絹糸						生穂重	子実重	飼料単位	
道立農試(種芸部)	8.10	8.16	10.6	黄終	146	241	113	3,915	428	753	1957~1961
渡島支場	8.3	8.10	9.20	黄	125	244	126	4,653	424	760	1959~1961
上川支場	8.3	8.11	9.30	乳終	136	261	127	5,615	553	904	"
十勝支場	8.13	8.16	9.23	糊	139	-	144	5,011	429	620	"
北見支場	8.16	8.23	-	乳	-	267	130	5,678	410	-	"
天北支場	8.10	8.20	9.29	乳終	137	229	101	5,349	404	682	"
原原種農場	8.15	8.18	10.2	糊	136	201	90	4,050	349	601	"

(2) 交6号 (月交431号)

来歴 「交6号」は、北海道農業試験場(畜産部)において、米国の市販一代雑種の2nd Cycle によって育成されたデント自殖系統間単交配と、日本在来種より育成したフリント自殖系統間単交配を父とした複交配一代雑種である。1956年(昭31)より生産力検定試験に供試し、1960年(昭35)より北海道立農業試験場の各支場で適応性を検定した。1962年(昭37)に優良品種に決定し農林省に新品種「交6号」(とうもろこし農林複交9号)と命名、登録された。組合せ内容および自殖系統の来歴は次のとおりである。

(「D403」×「D405」)(「T102」×「T107」)

「D403」および「D405」: 米国 Pride Hybrid Co. の市販品種「B32A」および「D63A」の2nd Cycle により育成。「T102」および「T107」: 日本在来種「月品226—甲洲」より育成。

特性概要 1. 粒色は橙黄色、粒質はセミデントである。

2. 熟期は「複交3号」より2~3日早い中生種である。

試験場名	抽出期		成熟期	生育日数	稈長	着穂高	10a 当り		1,000粒重	試験年次
	雄穂	絹糸					子実重	乾穂重		
北海道農試(畜産部)	8.8	8.13	10.15	152	243	106	617	-	313	1956~1961
十勝支場	8.6	8.17	9.27	130	(342)	131	576	1,006	332	1960~1961
北見支場	8.10	8.25	9.20	116	234	107	520	1,790	272	"
上川支場	7.31	8.9	9.25	130	238	117	583	-	336	"
原原種農場	8.8	8.14	9.28	136	198	84	509	-	285	"
渡島支場	7.25	7.31	9.20	130	238	115	565	-	357	"
道立農試(種芸部)	8.3	8.9	9.21	130	239	105	575	-	340	"

注: () 内は草丈

3. 草勢は良好で、不良気象条件の下においても安定した生育を示す。
4. 子実収量は「複交3号」よりややまさり収穫時の生草収量も多い。
5. 雌穂は円筒型であり、粒列数は10～16列で平均13.3列である。
6. 耐倒伏性は強い。

栽培適地および奨励態度 道中央部以南における子実用、道東北部におけるサイレージ用に適する。

(3) 交504号 (Ohio W64)

来歴 「Ohio W64」はデント種の複交配一代雑種である。1953年(昭28)米国オハイオ州農業試験場よりその親系統とともに導入された。

1954年(昭29)および1955年(昭30)には親系統の耐冷性形質について個体選抜が行われた。1956年(昭31)より、その他の米国より導入された一代雑種とともに生産力を検定し、1958年(昭33)より一部の北海道立農業試験場支場に配付し、1959年(昭34)よりさらに拡大して各支場に配付して適応性を検討した。1962年(昭37)優良品種に決定し、農林省に新品種「交504号」(とうもろこし導入5号)と命名、登録された。

組合せ内容は次のとおりである。

(「Oh51A」×「Ind WF9」)(「Oh43」×「Oh45」)

特性概要 1. 子実は黄色のデント種である。

2. 熟期は「複交3号」より1週間前後おそく、また「複交1号」より2日前後おそい晩生種である。
3. 子実重量、生草重量、乾物重量は「複交3号」に比し多収である。
4. 耐倒伏性は強い。

栽培適地および奨励態度 「交504号」は「複交3号」に換えて道南部における子実用、道中央部においては条件のよい所での子実用、また道中央部および道東、道北部におけるサイレージ用として全道的に栽培可能である。

試験場名	抽出期		成熟期	生育日数	稈長	着穂高	10a 当り			試験年次
	雄穂	雌穂					子実重	生穂重	乾穂重	
北海道農試(畜産部)	8. 8	8. 15	10. 18	147	220	79	556	2,980	—	1956～1961
十勝支場	8. 7	8. 12	—	—	(291)	90	—	3,894	1,089	1959～1961
北見支場	8. 9	8. 16	—	—	221	87	—	3,965	1,719	〃
道立農試(種芸部)	8. 2	8. 8	9. 22	131	211	76	587	—	—	1960～1961
渡島支場	7. 27	8. 4	9. 28	134	222	81	605	—	—	1959～1961

注：() 内は草丈

(4) 交 8 号 (長交347)

来歴 1961年(昭36)に長野県農業試験場桔梗ヶ原分場において「岩手エローデント」を母とし、合成系統「W531(455×466)」を父として交配した品種合成系統間交雑である。

1963年(昭38)より北海道立農業試験場十勝支場および北海道立農業試験場北見支場の系統適応性検定試験に供試したが成績が良好であったので、1966年(昭41)より現地試験に供試した。1968年(昭42)優良品種に決定し農林省に新品種「交8号」(とうもろこし農林交11号)と命名、登録された。

構成する品種および合成系統の来歴は次のとおりである。

「岩手エローデント」:1962年(昭37)に岩手県より取寄せ長野県農業試験場桔梗ヶ原分場で維持していたものである。

「W531(455×466)」:1954年(昭29)に単交配を行い、それ以後選抜固定をはかったものである。

特性概要 1. 絹糸抽出期は「複交8号」、「交6号」等の早生サイレージ用一代雑種と同程度であり、「交504号」よりは3日内外早い。十勝地方においては極端な冷害年を除き、収穫期までに糊熟期に達する。

2. 初期生育は「複交8号」、「交6号」、「交504号」より旺盛で「エローデント」並である。

3. 総生草収量は「複交8号」に比し約30%多く、「交6号」、および「交504号」より10~20%多い。

4. 生雌穂重は「複交8号」、「交6号」「交504号」に比し多く、乾子実重もこれらの品種より20~60%多い。

5. 栄養収量の試算値によると、飼料単位、可消化蛋白ともに「複交8号」、「交6号」、「交504号」に比し20~30%多い。

6. 雌穂は円筒型で太く長い。粒列は14~20行で1列粒数は約50粒、粒色は黄色である。

7. 稈長は「複交8号」および「交504号」よりやや高く、「交6号」並みである。また、着穂高はこれらの品種より15~45cm高い。稈茎は「複交8号」、「交6号」より太い。

8. 倒伏に対しては「複交8号」並で強いが、「交6号」、「交504号」よりは幾分弱い。

9. すず紋病に対しては「複交8号」、「交6号」、「交504号」より強い。

栽培適地および奨励態度 十勝、網走地方の「複交8号」、「交6号」、「交504号」におきかえて栽培する。また、同地方の「ジャイアンツ」、「エローデント」と配合して栽培する。

試験場名	抽出期		収穫時の熟度	稈長	着穂高	稈径	10a 当り			試験年次
	雄穂穂	絹糸					生総重	乾総重	飼料 単位	
十勝農試	8.3	8.10	黄中	288	145	1.97	5,678	1,076	564	1963~1967
北見農試	8.17	8.22	糊中	244	119	—	5,567	—	—	"
天北農試 (天塩支場)	8.18	8.24	糊初	197	95	—	4,484	—	—	1966
北海道農試 (作物第1部)	8.12	8.16	—	213	97	—	4,377	1,039	—	1965~1967
原原種農場	8.7	8.16	—	225	123	—	—	(617)	—	1966~1967
中央農試	8.17	8.20	—	210	102	—	—	(363)	—	1966

注:()内は子実重。

従来のサイレージ用品種と同様に欠株をださぬように留意して多肥条件で栽培することが必要である。栽植密度は4,500本/10a内外にとどめて子実の登熟をすすめ、頑健な生育をさせることが望ましい。

(5) ヘイゲンワセ (道交16号)

来歴 「ヘイゲンワセ」は北海道立十勝農業試験場において、1969年(昭44)に「N19×CM7」を母とし、「W41A×W79A」を父とした複交雑による(フロント種)×(デント種)の一代雑種である。

1970年(昭45)より「十交88」の系統番号で生産力検定試験に供試し、翌年以降は「道交16号」の系統名をつけて道内試験機関および現地試験に供試した。1973年(昭48)優良品種に決定し農林省に新品種「ヘイゲンワセ」(とうもろこし農林交16号)と命名、登録された。

構成する自殖系統とその来歴は次のとおりである。

「N19」:北海道農業試験場で在来種「坂下」より育成されたフロント種。

「CM7」:1964年(昭39)カナダ、モードン農試より分譲をうけたフロント種で「85×V3」の自殖により育成されたフロント種である。

「W41A」:1964年(昭39)ウイスコンシン大学より分譲をうけたデント種で「WN×WJ」の自殖により育成された。

「W79A」:「W41A」と同時にウイスコンシン大学より分譲をうけたものであり、「Minn.# 13 o.p」より育成されたものである。

- 特性概要 1.「交4号」よりも短稈で着穂高はやや高い。
 2.分けつの発生は少なく、成熟期まで残るものはほとんどない。
 3.全葉数は約14枚で「交4号」よりも1枚内外少ない。
 4.熟期は「交4号」よりも約3日早く、子実収量は「交4号」なみである。
 5.子実は黄色のセミデント種で、穂長、穂径、粒列数、および1列粒数はほぼ「交4号」並である。
 6.根系の発達が良好で耐倒伏性は「交4号」に比し極く強く、機械化収穫に適している。
 7.稈が短く、やや細いので生総重、乾総重ともに「交4号」より少ない。
 8.すす紋病に対してはやや弱、ないし弱である。
 9.採種栽培の点では両親を同時播種することができ、採種量も多い。

栽培適地および奨励態度 十勝、網走および上川北部の子実用品種「交4号」におきかえる。

試験場名	抽出期 月 日	成熟期 月 日	稈長 cm	着穂高 cm	稈 径 cm	穂長 cm	粒列数 行	10a 当り		1,000 粒 重 g	試験年次
								生総重 kg	子実重 kg		
十勝農試	8. 3	—	206	75	1.80	16.6	12.3	3,159	535	302	1970~1972
北見農試	8. 5	—	197	82	1.99	21.0	—	—	493	238	1971~1972
上川農試	7.29	9.18	218	85	—	20.3	—	—	642	331	〃
原原種農場	8. 2	9.22	162	68	1.70	18.4	—	—	664	359	〃
北海道農試	8. 4	9.26	163	66	—	17.9	—	—	681	318	〃

また、同地帯の山麓、沿海地帯の早生サイレージとしても利用できる。

短稈早熟で耐倒伏性が強いので、多肥密植栽培を行う。早生サイレージ用として利用する場合とはくに密植栽培が望ましく、6,000本/10a内外が適当である。

(6) ホクユウ (北交22号)

来歴 「ホクユウ」は北海道農業試験場において、1964年(昭39)に「N85×N21」を母とし、「T23×T24」を父とした複交雑によって育成されたフリント種一代雑種である。

1965年(昭40)より「月交207」の系統番号で生産力検定試験に供試し、1966年(昭41)以降「北交22号」の系統名をつけて道内試験機関において、主として子実用および一部サイレージ用として供試した。その後1970年(昭45)からは道内試験機関において、また1971年(昭46)から現地試験においてサイレージ用として供試した。また1967年(昭42)より岩手県農試において、すす紋病抵抗性の検定を行った。1973年(昭49)優良品種に決定し農林省に新品種「ホクユウ」(とうもろこし農林交16号)と命名、登録された。

構成する自殖系統およびその米歴は次のとおりである。

「N85」:岩内地方在来フリント品種「岩内在米A」より育成。

「N21」:十勝地方在来フリント品種「坂下」より育成。

「T23」および「T24」:イタリアより導入されたと推測されるフリント品種「Granoturo Marano」より育成。

特性概要 1. 稈長および着穂高は「交4号」と「交8号」の中間で、稈径はやや細い。

2. 分けつ数は多く、1株あたり有効雌穂数が多い。

3. 初期生育は旺盛で、登熟も良好である。

4. 熟度は「交4号」と「交8号」の中間である。

5. 生総収量に比べて乾物およびTDN収量が高い。とくに比較的寒冷地域、またはその他の地域においても冷害年次には、登熟の進捗が良好で、栄養収量の安定性が高い。

6. 耐倒伏性はやや強く、また耐病性は中間である。

7. 「N85×N21」の単交配採種の場合は「N21」を晩播して出穂期の調節をはかる必要がある。また「T23」、「T24」および「T23×T24」は高濃度の除草剤の使用をさける。

試験場名	粗糸抽出期	稈長	着穂高	収穫時熟度	10a 当り			乾物中TDN	試験年次
					生総重	乾総重	TDN		
北海道農試(草地開発第2部)	8.9	195	82	黄後	4,032	1,112	772	69.5	1971~1973
十勝農試	8.10	241	103	黄	4,394	1,072	735	68.3	"
北見農試	8.14	236	104	黄	6,137	(1,323)	(910)	(68.9)	"
上川農試	8.4	233	97	黄	4,225	(1,208)	(843)	(69.8)	"
中央農試	8.12	197	89	完	4,093	(1,565)	(1,070)	(68.4)	1971~1972
原原種農場	8.10	189	80	黄	3,843	(995)	(733)	(73.4)	1971~1973
根釧農試	8.24	209	76	乳後	6,200	(1,358)	(939)	(69.1)	1972~1973

() 内は1972年度の数値

栽培適地と奨励態度 十勝山麓・沿海地帯、釧路地方で気象条件の比較的良好な地域ならびに網走地方の一部における中生サイレージ用品種として利用する。

「交4号」や「交8号」よりも耐倒伏性はまさるが一部の外国輸入品種ほど強くないので、あまり極端な密植はさけたほうがよい。おおよそ4,500~6,000本/10a程度の栽植密度が適当である。

(7) ワセホマレ (道交S1号)

来歴 「ワセホマレ」は北海道立十勝農業試験場において、1970年(昭45)に「N19×To15」を母とし「CM37×CMV3」を父として組合せた(フリント)×(デント)の複交配一代雑種である。

1971年(昭46)より生産力検定試験を開始し、1972年(昭47)に「十交107」の系統番号をつけ、1975年よりサイレージ用として「道交S1号」の系統名をつけて道内試験機関および現地試験に供試した。また、すす紋病抵抗性検定試験およびごま葉枯病抵抗性検定試験にも供試した。1978年(昭53)優良品種に決し、農林省に新品種「ワセホマレ」(とうもろこし農林交21号)と命名、登録された。

構成する自殖系統の来歴は次のとおりである。

「N19」：北海道農業試験場において在来種「坂下」より育成されたフリント種。

「To15」：北海道立十勝農業試験場において、「黄早生」×「坂下と山本種の混合花粉」の自殖により育成。

「CM37」および「CMV3」：1964年(昭39)カナダのモードン試験場より導入したデント種。

特性概要 1.低温発芽性がすぐれ、初期生育が良好である。

2.稈長は「ヘイゲンワセ」より高いが着穂高は低く、稈径は太い。

3.耐倒伏性は強く、とくに着穂節の下部で折損することはほとんどない。

4.雌穂柄が短く雌穂の下垂がほとんどない。

5.分けつの発生はほとんどない。

6.葉身は長大で、草勢が極めて旺盛である。

7.絹糸抽出期は「ヘイゲンワセ」より2日程度おそい。中央部では9月下旬前半、山麓・沿海

試験場名	抽出期		収穫時 熟度	稈長 cm	着穂高 cm	10a 当り			乾物中 TDN %	試験年次
	雄穂 月日	絹糸 月日				生穂重 kg	乾穂重 kg	TDN kg		
十勝農試	7.30	8.4	黄後	194	55	2,334	828	619	75	1972~1977
北見農試		8.5	完	199	68	4,311	1,225	886	72	1973~1977
根釧農試		8.22	黄	194	72	4,248	970	679	70	1975~1977
天北農試		8.18	黄初	165	36	5,199	985	695	71	1977~
天北農試 天塩支場		8.9	黄	169	-	2,923	1,072	827	77	1976~1977
北海道農試		8.1	黄	166	55	(3,707)	(911)	(655)	(72)	1973~1977
上川農試		7.28	完	181	61	3,207	1,140	829	73	1975~1977
原原種農場		8.6	完	148	42	-	-	-	-	1973~1975

注：()内は1976, 1977の2ヶ年の平均値。

地帯では9月下旬後半に黄熟期に達し、初霜前に収穫適期に達する。

8. 子実収量は「ヘイゲンワセ」並であるが、茎葉収量が多いので、乾物収量、TDNは10%内外多収である。
9. 密植適応性は「ヘイゲンワセ」より低い。
10. 雌穂の形質はほぼ「ヘイゲンワセ」並みのフリントの強いセミデント種である。
11. すず紋病耐病性は中位、ごま葉枯病耐病性は強である。
12. サイレージの乾物回収率、飼料成分、消化率および化学的品質は「ヘイゲンワセ」並みであり、乾物中TDNは70%以上である。

栽培適地および奨励態度 「ヘイゲンワセ」におきかえ、道東、道北の内、根釧沿海および宗谷北東部を除く地帯。

極端な密植は無効雌穂着生個体が発生するので中央部や内陸部では、7,000本/10a内外、山麓沿海地帯では5,000本/10a内外が適当である。

(8) P3715

来歴 「P3715」は米国のPioneer社が育成した品種である。1970～1973年(昭45～49)にかけて北海道農業試験場(草地開発第2部)および北海道立十勝農業試験場において品種試験に供試した。1974年(昭49)に「P3620」とおきかえるべき品種として優良(準奨励)品種に決定された。構成する自殖系統については不明である。

- 特性概要 1. 絹糸抽出期は「交8号」に比し1日内外早いデント種である。
2. 稈長は「交8号」よりも幾分低い。
 3. 生総収量は「交8号」に比し若干少ないがTDN収量では逆に若干多い。
 4. すず紋病抵抗性は「交8号」並みでやや強い。

栽培適地および奨励態度 「P3620」におきかえる。道央ならびに十勝地方の内陸平野部。

試験場名	絹糸抽出期	収穫期	収穫時熟度	稈長	着穂高	10a 当り			乾物中TDN	試験年次
						生総重	乾総重	TDN		
北海道農試(草地開発第2部)	8.15	10.1	糊中	209	99	4,883	1,262	955	75.6	1970～1973
十勝農試	8.16	9.24	糊初	253	114	5,625	(1,425)	(1,004)	(70.4)	1970～1973

注：()内は1973年のみの数値。

(9) C535

来歴 「C535」はオランダのVan der Have社が育成した品種である。1973年(昭48)以降、北海道立根釧農業試験場、同十勝農業試験場、同北見農業試験場で品種試験に供試した。1976年(昭51)北海道の早生サイレージ用品種の種子不足対策のため優良(準奨励)品種に決定された。来歴および構成する自殖系統名については不明である。

特性概要 1. 初期生育は中位であり、分けつの発生は極く少ない。

2. 稈長は「ヘイゲンワセ」より幾分高い。
3. 絹糸抽出期は「ヘイゲンワセ」より3日程度おそい。
4. 耐倒伏性はやや強である。

栽培適地および奨励態度 十勝、網走の全域および根釧内陸部。

試験場名	絹糸抽出期	稈長	着穂高	収穫時熟度	10a 当り			乾物中 T D N	試験年次
					生総重	乾総重	T D N		
根 釧 農 試	8. 25	215	66	糊	4,418	964	678	70.3	1973~1975
北 見 農 試	8. 16	179	—	黄	3,710	1,130	810	71.7	1973
十 勝 農 試	8. 4	200	82	黄 後	3,440	1,118	839	75.0	1973~1975

(10) P3575

来歴 「P3575」は米国の Pioneer 社が育成した品種である。1974~1975 (昭49~50) にかけて北海道農業試験場 (草地開発第2部) および北海道立道南農業試験場で品種試験に供試した。1976年 (昭51) 優良 (準奨励) 品種に決定された。構成する自殖系統については不明である。

特性概要 1. 絹糸抽出期は「ジャイアンツ」とほぼ同一であって晩生種に属する。

2. 初期生育は劣るが、その後の生育は旺盛である。
3. 耐倒伏性については「ジャイアンツ」に比し強い。
4. 病害抵抗性については不明である。
5. 生総収量は「ジャイアンツ」に比しやや劣るが、雌穂の登熟性が良好なため全乾物収量、TDN 収量も「ジャイアンツ」にまさる。

栽培適地および奨励態度 道央、道南地方。

試験場名	絹糸抽出期	収穫期	収穫期の熟度	稈長	着穂高	10a 当り			乾物中 T D N	試験年次
						生総重	乾総重	T D N		
北海道農試 (草地開発第2部)	8. 18	10. 4	糊 終	228	106	6,561	1,669	1,198	71.7	1974~1975
道南農試	8. 13	9. 30	黄	235	109	6,168	1,735	1,239	71.5	"

(11) P3390

来歴 「P3390」は米国の Pioneer 社が育成した品種である。1973年 (昭48) 以降、北海道農業試験場 (草地開発第2部) および北海道立道南農業試験場で品種試験に供試した。1976年 (昭51) 晩生品種の種子不足対策のため優良 (準奨励) 品種に決定された。

構成する自殖系統については不明である。

特性概要 1. 絹糸抽出期は「ジャイアンツ」に比し1~2日遅い晩生のデント種である。

2. 初期生育は劣るが、その後の生育は旺盛である。

3. 耐倒伏性は「ジャイアンツ」に比し強い。
4. 生総収重, 乾物収重, TDN 収量ともに「ジャイアンツ」に比しやや多い。
5. 耐病性については不明である。

栽培適地および奨励態度 道央および道南地方。

試験場名	粗糸抽出期	収穫期	収穫時熟度	稈長	着穂高	10a 当り			乾物中 TDN	試験年次
						生総重	乾総重	TDN		
北海道農試 (草地開発第2部)	8. 17	10. 3	糊 末	226	116	6,494	1,640	1,177	71.7	1973~1975
道南農試	8. 12	9. 24	黄 中	243	127	6,376	1,649	1,178	71.3	1974~1975

(12) JX188

来歴 「JX188」は米国の Jacques 社が育成した品種である。1974年(昭49)以降北海道農業試験場(草地開発第2部), 北海道立上川農業試験場および同道南農業試験場で品種試験に供試した。1976年(昭51)に優良(準奨励)品種に決定された。構成する自殖系統については不明である。

- 特性概要 1. 粗糸抽出期は「ジャイアンツ」に比し2日程度早い晩生のデント種である。
2. 初期生育は劣るが, その後の生育は旺盛である。
 3. 耐倒伏性については「ジャイアンツ」に比し強い。
 4. 耐病性については不明である。
 5. 生総収量, 乾物収量, TDN 収量は「ジャイアンツ」並か幾分劣る。

栽培適地および奨励態度 道央および道南地方。

試験場名	粗糸抽出期	収穫期	収穫時の熟度	稈長	着穂高	10a 当り			乾物中 TDN	試験年次
						生総重	乾総重	TDN		
北海道農試 (草地開発第2部)	8. 17	10. 3	糊 終	252	110	6,458	1,665	1,157	69.3	1974~1975
上川農試	8. 14	9. 23	糊 終	264	136	7,210	1,760	1,230	70.0	1975
道南農試	8. 10	10. 1	黄 終	259	114	6,569	1,670	1,213	72.6	"

(13) JX162

来歴 「JX162」は米国の Jacques 社が育成した品種である。1974年(昭49)以降北海道農業試験場(草地開発第2部), 北海道立道南農業試験場および同上川農業試験場で品種試験に供試した。1976年(昭51)に晩生品種の種子不足対策のため優良(準奨励)品種に決定された。構成する自殖系統については不明である。

特性概要 1. 粗糸抽出期は「交8号」より2日おそく, 「ジャイアンツ」より2日早い晩生種である。

2. 稈長は「交8号」よりやや低く、着穂高も低い。
3. こま葉枯病、すす紋病ともに「交8号」「ジャイアンツ」より強いほうである。
4. 倒伏・折損は若干認められるが、「交8号」「ジャイアンツ」より強い。
5. 乾物中に占める子実割合が高く、茎葉の緑度保持期間が長く、茎葉乾物収量も高い。TDN収量で「交8号」より10%程度まざる。

栽培適地および奨励態度 種苗需給事情の緊急性にかんがみ、既往の「交8号」「ジャイアンツ」を補填し、「W573」に代わる品種として道央、道南全域および上川の比較的条件のよい地帯を中心として奨励する。

試験場名	絹糸抽出期	収穫期	収穫時の熟度	稈長	着穂高	10a 当り			乾物中 T D N	試験年次
						生稈重	乾総重	T D N		
北海道農試 (草地開発第2部)	8.16	10.3	黄 初	226	96	6,218	1,620	1,135	70.1	1974~1976
道南農試	8.9	10.1	黄 後	244	115	6,394	1,806	1,298	71.9	1975~1976
上川農試	8.7	9.25	黄 後	215	91	5,945	1,533	1,078	70.3	"

<生食用>

(14) ゴールデン・ビューティ (Golden Beauty)

来歴 「ゴールデン・ビューティ」は米国マサチューセッツ大学の W.H.Lachman 教授が育成した品種である。北海道農業試験場において1958年(昭33)生食加工用品種の比較試験に供試した結果、極早生種として品質、収量ともに有望と認めたので、1960年(昭35)に同教授より、その両親自殖系統の分譲をうけ、組合せ交配を行った。組合せ内容は(「C13」×「Ma2547-1-1」)である。

1961年(昭36)より生産力検定試験を行い、1962年(昭37)には道内試験機関において地方適否を検定し、1963年(昭38)優良品種に決定し、原名から「ゴールデン・ビューティ」と命名された。

特性概要 1. 極早生種に属し、絹糸抽出期では「ゴールデンバンタム」に比し7日前後早く、「ゴールデン・クロス・バンタム」より2週間前後早い。

2. 草勢は「ゴールデンバンタム」より短程で分けつは少なく、耐倒伏性は強い。

試験場名	絹糸抽出期	収穫期	収穫迄日数	稈長	着穂高	雌穂の形質			10a 当り 経済雌穂重	試験年次
						雌穂長	雌穂径	粒列数		
北海道農試 (畜産部)	7.28	8.19	95	134	28	18.5	4.5	12-14 12.5	993	1961~1962
十勝支場	7.24	8.20	97	(213)	34	16.5	4.4	-	697	1962
北見支場	8.5	8.26	103	145	43	17.9	4.6	-	824	"
天北支場	8.9	9.2	108	151	34	17.8	4.5	-	770	"
上川支場	7.28	9.10	-	-	-	-	-	-	720	"
道立農試 (種芸部)	7.27	8.18	97	133	26	15.3	4.1	-	595	"

注:()内は草丈を示す。

3. 雌穂は円筒型で粒列は10~14行、粒着は良好で生食適期における経済雌穂重は多い。
4. 品質は極早生種としては極めて良好で、食味もよい。

栽培適地および奨励態度 「ゴールデン・ビューティ」は早期の生食用または缶詰加工用として有効積算気温900℃以上であれば全道的に栽培可能である。極早生の短稈種であるから栽植密度は慣行より密植にしてよく、10アール当り5,000~6,000本が適当である。

(15) ピリカスイート (十生7号)

来歴 「ピリカスイート」は北海道立十勝農業試験場において、1971年(昭46)に「Ma 21547」と「V574」との交配を行い、1972年(昭47)より生産力検定試験に供試した。しかし採種栽培の面よりみて逆交配組合せが好都合と考えられ、1973年(昭48)より「V574」×「Ma 21547」の形で生産力検定試験に供試するとともに、道内各試験機関に配付して地域適応性を検定した。

1975年(昭50)優良品種に決定し農林省に新品種「ピリカスイート」(とうもろこし農林交19号)と命名、登録された。

構成する自殖系統の来歴は次のとおりである。

「V574」：オンタリオ園芸試験場 Vineland 試験地で「(Me 100×V3) Open」の自殖により育成、1970年(昭45)に導入。

「Ma21547」：マサチューセッツ農試において育成、「ゴールデン・ビューティ」の親系統。

特性概要 1. 稈長および着穂高は「ゴールデン・ビューティ」よりやや高い。

2. 分けつ数は「ゴールデン・ビューティ」よりやや多い。
3. 初期生育はやや良好である。
4. 収穫期は「ゴールデン・ビューティ」より4日内外おそく、「ゴールデン・クロス・バンタム」よりは15日内外早い早生種である。
5. 有効雌穂数が多く、剥皮雌穂重は「ゴールデン・ビューティ」より10%内外多い。
6. 耐倒伏性は中位、すす紋病抵抗性は他のスイートコーン品種と同様に弱い。
7. 絹糸色は苞皮の内外ともに無色である。
8. 穂形は円筒状で平均一穂重は「ゴールデン・ビューティ」よりやや重い。粒列数は12~14行の個体が大半である。
9. 粒色は鮮黄色で、極良好であり、食味および芳香ともに良好で加工適性が高い。加工用としては粒型の点よりみてクリーム缶詰に適す。
10. 種子親と花粉親の開花期がほぼ一致しているので同時播種による採種栽培が可能である。

試験場名	絹糸抽出期	収穫期	収穫迄日数	稈長	着穂高	10 a 当り		有効雌穂長	平均1穂重	試験年次
						雌穂数	雌穂重			
十勝農試	8. 5	8. 28	107	164	48	4,960	920	16.0	187	1972~1974
北海道農試	8. 2	8. 24	100	148	43	5,060	1,060	18.0	209	1973~1974
北見農試	8. 9	9. 1	109	159	51	4,280	978	16.9	229	"
中央農試	8. 2	8. 20	97	125	33	4,970	1,043	18.1	210	"
原原種農場	8. 1	8. 21	99	125	41	4,510	904	19.0	200	"

栽培適地と奨励態度 北海道全域のスイートコーン栽培地帯に適する。加工用として栽培する場合はクリーム状缶詰原料として、「ゴールデン・ビューティ」と配合、または「クィーン・アーン」とおきかえて栽培する。

多肥栽培が望ましいが、栽植密度は4,500~5,000本/10a内外にとどめるべきである。

(16) 北缶3号 (HLC145)

来歴 「北缶3号」は、北海製缶株式会社缶詰研究所において1967年(昭42)に米国ウイコンシン大学より24自殖系統の分譲をうけ、以後その能力の検定を行ったが、導入系統のうち「Mel23」は雌穂の形態が優れて注目されたので、1970年(昭45)に既存自殖系統「Ma21547-1-1」との交雑を行い、以後「HLC-455」の系統名をつけて生産力検定を行うとともに、道内の試験機関で供試し地域適応性を検定した。北海道農業試験場において、すす紋病、ごま葉枯病耐病性の検定も行った。1976年(昭51)に優良品種に決定し、「北缶3号」と命名された。両親系統の来歴は次のとおりである。

「Mel23」：ウイコンシン大学より導入したが導入当時より雌穂の形態がよく注目されていた。

「Ma21547-1-1」：マサチューセッツ大学において、「Me2」の自殖により育成されたものである。

- 特性概要 1. 初期生育は「ピリカスイート」並みの中位で分けつ数は少ない。稈長、着穂高は「ゴールデン・ビューティ」、「ピリカスイート」と同程度である。
2. 有効雌穂数は「ゴールデン・ビューティ」並みであるが、「ピリカスイート」よりは若干少ない。
3. 収穫期は極早生種の「ゴールデン・ビューティ」より5日内外おそく、「ピリカスイート」より1日程度おそい早生種に属する。「ゴールデン・クロス・バンタム」よりは12日内外早い。
4. 剥皮雌穂重は「ゴールデン・ビューティ」より20%内外多く、「ピリカスイート」並であり、早生種としては多収である。
5. 耐倒伏性は中程度であって、「ピリカスイート」並である。
6. すず紋病抵抗性は他のスイートコーン品種と同様に弱い。
7. 早生種としては雌穂長が極めて長く、平均1穂重が重く、穂揃いは良好である。

試験場名	絹糸抽出期	収穫期	稈長	着穂高	株当り有効穂数	有効雌穂長	平均1穂重	粒列数	10a当り剥皮穂重	試験年次
	月日	月日	cm	cm	本	cm	g	列	kg	
十勝農試	8. 8	8. 29	156	42	1.08	17.7	209	13.5	1,000	1973~1975
北海製缶詰研究所	8. 4	-	133	41	1.25	18.2	213	12.8	1,169	1971~1975
北海道農試(草地開発第2部)	7.31	8.22	145	40	1.10	18.9	211	12.7	1,070	1973~1975
北見農試	8.10	8.29	148	42	1.00	17.9	237	12.8	1,051	"
原原種農場	7.31	8.20	120	34	1.03	19.9	201	12.8	922	"
中央農試	8. 3	8.23	125	31	1.10	18.4	215	12.6	1,060	"
上川農試	7.26	8.18	160	47	1.27	17.7	194	12.6	1,091	1975

8. 粒列数は平均12.8列で12列が大半を占める。
9. 雌穂は円筒形でやや先細り型であり、外観は良好である。
10. 粒色は鮮黄色で「ゴールデン・ビューティ」に比し良好で「ピリカスイート」並である。
11. 絹糸は苞皮の内外ともに無色である。
12. 食味、香味共に良好であり、その他の特性よりみて生食加工用、軸付冷凍用に適している。また缶詰加工として利用する場合は、ホール加工用として利用できる。

栽培適地および奨励態度 生食市場用および軸付冷凍用早生品種として、北海道全域のスイートコーン栽培地帯に適する。

なお本品種を生食市場用として利用する場合には、さらに熟期の早い「ゴールデン・ビューティ」と配合する。

早生品種の栽培法に準じ多肥栽培することが望ましい。また栽植密度はやや密にしても雌穂の形質は低下しないので、5,500本/10a内外が適当である。

(17) ホワイトワキシー

来歴 1956年(昭31)に北海道立農業試験場(種芸部)において、白色糯系統「S-339」を母とし、「マンモスホワイトデント」を父親として交配、1961年(昭36)まで(マンモスホワイトデント)を反復親として戻し交配を4回繰り返す。この間、花粉のヨード反応により遺伝子型WXwX個体を選択した後、Wxwx種子を選択、1962年(昭37)に雌穂選抜を行った。1963年(昭38)以降3ヵ年生産力を検定し、1963-64年(昭38-39)の2ヵ年にわたりすす紋病抵抗性検定を行った。1965年(昭40)には現地試験を実施し地方適否を確かめ、1966年(昭和41)優良品種に決定し、「ホワイトワキシー」と命名された。

特性概要 1.反復親である「マンモスホワイトデント」と同程度の熟期であり、中生種の「複交8号」に比しやや早い晩生種である。

2.子実収量については、「マンモスホワイトデント」よりやや多いが、「複交8号」の70%程度である。

3.「複交8号」よりやや長程であるが、耐倒伏性は「複交8号」なみで中程度である。

4.すす紋病耐病性は「マンモスホワイトデント」と同じくやや強い。

5.ワキシー澱粉は粘着性、膨潤性、溶解性、透明性などがデント種の澱粉に比しすぐれており、加工食品原料、工業原料として利用度が大である。

栽培適地および奨励態度 道南地方および道央南部。とうもろこしの他の品種の栽培圃より少なくとも300m以上離して栽培し、粒のキセニア化を防ぐ。会社との契約栽培が必要である。

試験場名	絹糸抽出期	成熟期	稈長	着穂高	雌穂長	雌穂径	粒列数	1,000粒重	10a当り子実収量	試験年次
	月日	月日	cm	cm	cm	cm	列	g	g	
道立農試(種芸部)	8.18	10.3	193	96	14.5	3.9	13.3	241	284	1963~1966